

2017年10月22日(日)

説教:「解放の知らせ」

聖書:ルカによる福音書4:14~21

ルカ4章14節は宣教に立ち上がったイエスの姿を描きます。そのイエスには深い渇きがありました。その渇きは4章1節以下が語る荒野の誘惑の話が示します。イエスの葛藤は、不条理に苦しむ隣人とどのように生きるかという問いです。イエスにとって耐えがたいことは、だれもが一人残さず神の子として祝福されて生きる存在なのに、力ある人たちに排除され困窮し、不当な貧しさで病と侮辱に追いやられている民衆の現実でした。

荒野の誘惑でイエスは格闘します。現実の社会の悪と罪に苦しむ様々な人々、すなわち「貧しい人」と表現される人々を神はどのようにお救いになるのか、自分はその神のお働きの中で、どのように生きることを求められているのか。

イエスは、自らの使命をイザヤの言葉に託して語ります。4章18-19節です。イエスは神の救いは徹底した救いだと信じました。だから神の救いは精神的慰めに終わらない。その時代や社会の悪と罪によって損なわれた人の心も体も、現在の人生も救う力という意味で「解放する」と表現します。

イエスはその使命を告げると共に、神の解放の働きに人々が加わるようにと招きます。4章21節を逐語的に訳せば「ここに書かれてあることが、今日、あなた方の耳で成就したのだ」となります。イエスの解放の働きが実現していくのは、彼の言葉を聞いた者の「耳で」といいます。イエスの言葉を聞いた人自身の「人生で」実現すると語りかけたのです。

イエスは私たちの人生には、可能性が秘められていると言います。私たちの日常からかけ離れたことではありません。誰かが不当な苦しみの中で人間仲間から忘れられてしまうことがないように。誰かが悔しいままで終わらないように。また誰かが私の人生は何の意味もなかったと絶望して終わってしまわないように。神からいただいた人生を全うする意欲を取り戻せるように。もう一度歩き始められるように。これでよかったと思える幸いに出会えるように。そのような事実がつくり出される、そのような事実を通して神の解放の働きが実現します。その働きに大小はありません。私を用いるのは神ご自身です。(大倉一郎)